

韓国における新しい評価体制

— 高校における歴史教育を例に —

鄭 潤 任 (韓国馬山商業高等学校)
土 屋 武 志 (愛知教育大学史学教室)

The new evaluation system in Korea — In case of high school history education —

JEONG YOON IM (Masan commercial high school, Korea)
TSUCHIYA TAKESHI (Department of History, Aichi University of Education)

要約：韓国においては、2000年から第7次教育課程が段階的に実施される。この新しい教育課程は、評価方法の改善に特に留意した改革である。本論文では、高等学校における歴史（国史）教育を例に、その新しい評価の特徴を紹介した。この新教育課程は、「遂行評価」という、学習者の考察過程を評価する方法を導入している。この評価方法を実施可能にするために評価基準が作成され公表されている。

キーワード：歴史教育・評価・遂行評価・韓国

1. はじめに

韓国の新しい教育課程（第7次教育課程）が2000年から段階的に適用されることになった。高校では2002年3月1日から1年生を対象に実施され、2004年に3年生までの完全適用となる^(註1)。第7次教育課程の特徴は国民共通基本教育の重視、水準別、選択中心教育課程であり、国家レベルでの教育課程の質の管理の必要性が強調されている^(註2)。新教育課程を各学校において確実に実施するため、評価基準を国家レベルで管理する必要が主張され、本論で述べるように改訂に際して従来以上に考慮された。^(註3)

現在韓国で実施されている第6次教育課程は教育課程の決定の権限を中央から地域単位、学校単位に移行している点が特徴である。第6次教育課程では「教科書中心」ではなく、学校教育及び学校単位の「教育課程中心」の教育が強調された^(註4)。しかしながら、実際にその教育課程における科目別の目標と内容は、一般的で抽象的なものであり、第6次教育課程下でも学校教育は教科書にある一般的な内容を教えることのみとどまり、地域や学校の特色があらわれることは少なかった。それ故、今回の第7次改訂においては、高校共通必修の10科目（倫理、国語、共通数学、共通社会、国史、共通科学、体育Ⅰ、音楽Ⅰ、美術Ⅰ、共通英語）に対して、国家教育課程に基づいた評価基準（成就基準、評価基準、等級化の方案）を開発することになった。それは教育課程で多少曖昧に叙述されている科目別教育内容をより具体化して、第6次教育課程の狙いである教育課程中心教育を達成させようとするものである^(註5)。即ち、学習目標——実際の指導——評価を一貫させることによって、教授・学習活動を

改善する契機とするもので、新しい評価体制を通して教育正常化を目指しているといえる。

高校は2002年から新しい教育課程が始まるが、その激しい変化からの衝撃を緩和させるため、1999年から新しい評価方法の適用が奨励されている。本稿では韓国の高校に於ける国史（韓国史）の評価方法の改善プランを中心にして、韓国における教育改革の動向を紹介する。

2. 「新しい評価体制」の背景

韓国は教育における大学入試の影響が強い国である。近来、大学入試や高校入試で内申書の占める割合が高くなり、入学試験以上に内申成績が重要な意味を持つことになった。それ故、評価の客観性が求められ、評価は学習者の相対的な席次を算出することを主な目標とした客観性や効率性の高いものが求められている。

従来、内申書では「相対評価」で規準集団内での席次を明らかにするぐらいであった。即ち、各教科で意図する教育目標に各生徒がどの程度到達したかを考慮することはせず、教師が恣意的に出した問題をもって、同級生内の席次を相互比較することにより、成績を算定したのである。このような評価は規準集団内に於ける席次以外に教育的に意味のある何の情報も提供することができないと言う本質的な問題を持っていた。また、この「相対評価」は学校間の格差を考慮する手段を持っていないので内申書による選考自体がその客観性において根本的な問題を呼び起こす事になった。これらの要因は科目別に客観的で妥当な評価基準が設定されていない状況でなされたからであると考えられた。これが評価基準を作って「絶対評価」を体系的に実行

しようとする直接的契機になった^(註6)。

このような「相対評価」中心の教育現場で一番多く使われたのは採点の客観性があり、気軽に使える「選択型評価」であった。「選択型評価」は複数の選択肢から正答を選び出す形のペーパーテストによるもので、単純な知識や情報の習得の可否を評価するには良いが、学習者の学習過程についての評価、創造性、問題解決力、批判力、判断力、統合力、情報収集力、分析力など高等思考技能を評価するのが難しかった。そのため、教授・学習活動を改善するには不適切であり、又、認知的・情意的・心動的領域を総合的に評価ができず、学習者個人の人々の全人的発達に対する評価に至らない評価方法と見なされている^(註7)。そこで、今回、韓国でこのような選択型評価の問題点を克服する一つの対案として提示されているのが『遂行評価』である。

『遂行』とは一般的に「計画通りやり遂げる」という意味で、具体的な状況下で実際に話す、聞く、書く、描く、作る、行動する過程やその結果を意味する。韓国の国家機関として権威ある韓国教育課程評価院では、『遂行評価』を「学習者が学習課題を遂行する過程や其の結果を見て教師が学習者の知識や技能や態度等に対して専門的に判断する評価方式」として定義している。そして「学習者が自らの知識や技能や態度を表すことができるように答えを作成（叙述または構成）したり、発表したり、産出物を作ったり、行動に表すように要求する評価方式である」と述べている^(註8)。

現在よく使用されている『遂行評価』の方法は叙述型検査、論述型検査、口述試験、討論法、実技試験、実験・実習法、面接法、観察法、自己評価報告書法、仲間評価報告書法、研究報告書法、ポートフォリオ (Portfolio) 法などである。

このような方法は過去にもあったもので、学習に於いて既存の権威や価値観に対する受動的な受容より自分なりの世界を再構築していく過程を強調する近來の認知心理学にのっとって創造性や問題解決力など高等思考技能を把握し、伸ばすための遂行評価方法として新しく注目を浴びている。遂行評価の方法は相互排他

ることを強調するので多様な教授・学習方法等（例えば、役割劇、現場調査、作品感想、製作、展示会、発表大会、協力学習、新聞活用教育、Jigsaw、Project等）が遂行評価のための評価方法になる^(註9)。

論述型及び叙述型の評価は以上の色々な遂行評価方法の中で比較的同じ条件で評価ができる長所がある。その客観性のためには答案例と採点基準の前提が要求されている^(註10)。

さて、高校の『国史』において遂行評価を実現させるため、韓国教育課程評価院では論述型、及び叙述型を中心とする『高等学校国史評価方法改善方案』（1999.1）の資料集を作り、配布している。

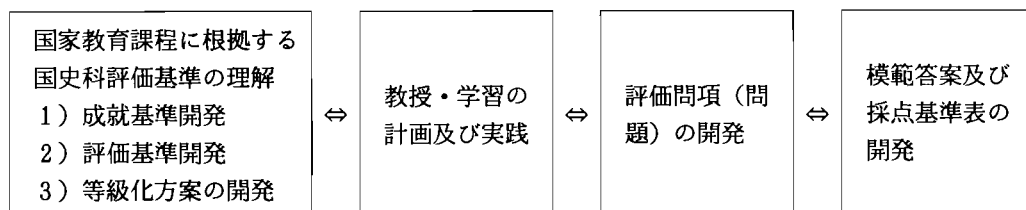
今度の新しい評価体制はまず高校から始められ、教授・学習の内容や方法まで変える教育改革にも連動している。学校現場では、期待とともに不安を持ちながら、部分的に遂行評価を取り入れることになった。教師は評価の改革の必要性については同感しながらも、評価基準の妥当性と実用性などを懸念している。教師と生徒は新しい評価体制に混乱を感じており、また、教授・学習活動及び評価に専念できる教育条件の改善も強く要求されている。

3. 国史科教育課程と論述型及び叙述型問項の開発の手順

この節では、韓国教育課程評価院が示した評価方法を紹介する。（表1）は韓国教育課程評価院が提示した国家教育課程に根拠する国史科評価問項（問題）の開発手順である。国家教育課程に準拠する（絶対）評価基準は国家が開発するため、各学校では評価問項と模範答案及び採点基準表の開発が求められる。

1) 成就基準の開発^(註12)

成就基準とは各科目別教授・学習活動の中で実際の基準となるように現行国家水準の教育課程を具体化し、学習者が成就する能力、または特性の形態で叙述したものである。つまり、成就基準とは国家教育課程で提



（表1）国史科の国家教育課程に根拠する評価問項の開発の手順^(註11)

示の言うより相互補完的であり、教授・学習の過程を改善し、個別学習者に指導・助言・忠告するための目的で使用できるなら、如何なる評価方法も遂行評価の方法に包含できると考えられている。特に遂行評価では教授・学習活動と評価活動が相互統合的に進行され

示されている科目別目標と内容を具体的に限定し、そこに含まれている意味を学習者が成就する能力と特性の形態で明示し、何を教え、何を習うかを明確に提示することである。

2) 評価基準の開発^(注13)

評価基準とは科目別評価の中で実際の基準となるように各評価領域に対して、学習者が成就した程度を複数の水準（レベル、例えば：上・中・下）で区切り、各水準で期待される成就基準を具体的に示すことである。つまり、評価基準とは評価領域別に学習者の成就程度を上・中・下と判定するため、実際の指針になるように具体的に叙述し示すことである。

上・中・下の評価基準は国家教育課程に基づいて区分したもので、各水準の意味は国家教育課程に照らして把握することができる。韓国の国家教育課程は原則的に当該学習者が成就すべき必修内容を中心に科目別、学年別に構成されている。故に、高等学校共通必修の10科目に対する教育課程の内容も原則的に高等学校1年なら誰でも成就すべき必修内容を中心に構成されている。

このような教育課程に照らしてみると、評価基準の中水準とは高等学校1年の学習者が充実した教授・学習過程を通して成就すべきだと期待される水準である。それ故、中水準に到達した学習者は原則として高等学校1年なら誰でも成就すべき必修内容に到達したと言えるのである。評価基準の上水準は中水準に到達していると同時に中水準より深化・発展された内容に到達したと言う水準であり、下水準は中水準に到達していない水準として、原則的に高等学校1年生なら誰でも成就すべき必修内容に到達していない水準であると言える。

3) 等級化方案の開発^(注14)

現実的に学習者の学業成就程度はどのような形態にせよ、その結果を算出し、報告しなければならない。等級化方案とは、各科目の教育課程の中領域別（中単元）の学習者の成就水準を上・中・下で判定して提示し、学年末の学校生活記録簿に記載するため、ある科目全体に対する成就基準を秀・優・美・良・佳の評語で判定するための方法を言う。この等級化方案は成就基準と評価基準が開発された後、実際に評価を実施し、その結果を報告する方法と手順を指す。

韓国教育課程評価院が提示した等級化方案は現行の第6次教育課程及び学校生活記録簿で使えるように設定された。ただし、点数を100点を満点にする基準で

はないことは従来との大きな違いの一つである。等級化方案に従って成績を算出する過程は次のようである。

- ① テストを教育課程の中領域（中単元）別に実施する。試験範囲の中領域を確かめ、各中領域にどのような評価方法を活用するかを決定する。従来のように一度にテストをするより、随時に評価することが望ましい。最終的に各中領域別の成就水準を上・中・下で表すことができると良い。
- ② 学習者の成就水準は各中領域別に把握する。故に、学習者の成績は（表2）の当該中領域の上・中・下の成就水準で提示する。
- ③ 随時評価、或いは1学期の中間・期末試験や2学期の中間・期末試験にも上のような profile 型成績表を作成し、（表3）のように学年末に相互的に提示する。
- ④ 最終的に学年末に〇〇科目の成就水準を秀・優・美・良・佳に表すため、各中領域の成就水準を（表4）のように換算点数に変える。
- ⑤ 換算点数の総点を算出した後、（表6）の中領域別の成就水準の平均と秀・優・美・良・佳との関係表を利用し、中領域別平均点数を算出した後、（表5）のように秀・優・美・良・佳の評語を算出する。

4) 評価問項（問題）の開発^(注20)

適切な評価領域を選定する。状況により、ある評価領域は論述型及び叙述型でない他の評価領域がもっと望ましい時があるからである。論述型及び叙述型の問項を開発した後、それに従う模範答案と採点基準を作成する。特に、国家教育課程による評価は学習者の成就水準を各科目の教育課程の中領域単位で上・中・下に判定することが大切なので、評価問項及び採点基準は各評価領域で上・中・下の水準が把握できるように開発する。

5) 評価の実施及び採点^(注21)

評価問項と模範答案及び採点基準表が適切であったら、採点そのものは特別な問題にならないので模範答案及び採点基準表を作るのに最善を尽くさなければならない。

上	◎		◎	
中	◎	◎	◎	
下	◎	◎	◎	◎
中領域	中領域 1	中領域 2	中領域 3	中領域 4
大領域	大領域 I			大領域 II

（表2）A君の〇〇科目◇◇試験の成績表（中領域の数：4個）^(注15)

上	◎		◎		◎	◎				◎	◎				◎	
中	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎		◎	◎
下	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
中領域	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
大領域	I			II			III			IV			V			

(表3) 学年末のA君の○○科目◇◇試験の成績総合(総中領域の数：16個) (注16)

中領域の成就水準	換算点数
上	2
中	1
下	0

(表4) 成就水準の換算表 (注17)

中領域	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
成就水準	上	中	上	下	上	上	中	中	下	中	上	上	中	下	中	上
換算点数	2	1	2	0	2	2	1	1	0	1	2	2	1	0	1	2
総点	20															
平均	$20 \div 16 = 1.25$															
評語	美															

(表5) 評語の算出表 (注18)

1.5	上	秀	1.7
		優	
0.5	中	美	1.3
		良	
	下	佳	0.3

(平均点数)

(平均点数)

上 (平均1.5以上) 中 (平均0.5以上1.5未満) 下 (平均0.5以下)

秀 $(1.7 + \alpha)$ ・優 (1.5 ± 0.2) ・美 (1 ± 0.3) ・良 (0.5 ± 0.2) ・佳 $(0.3 - \alpha)$

(表6) 中領域別の成就水準の平均と秀・優・美・良・佳との関係表 (注19)

4. 国史科論述型及び叙述型評価問項（問題）

開発例

次は以上の手順に基づいた国史科論述型及び叙述型評価問項の開発の一例である^(注22)。

(表7)

大領域	Ⅱ. 先史文化と国家の形成	中領域	2. 先史文化の展開
成就基準	農耕や牧畜の始まりと普及で新しく展開された新石器時代の社会像が説明できる。		
評価基準	上	農耕や牧畜の始まりと普及から新しく展開された新石器時代の社会像を関連させ、説明することができる。	
	中	農耕や牧畜の始まりと普及から新しく展開された新石器時代の社会像が列挙できる。	
	下	農耕や牧畜の始まりと普及から新しく展開された新石器時代の社会像を断片的に言える。	
問項形態	論述型	水準区分	上/中/下

— 問項（問題） —

(上/中/下) 新石器時代の人類の暮らしが旧石器時代より良くなった証拠は色々あるが、一番目立つのは土器である。新石器時代の人々が土器を作った理由を定着及び農耕生活と関連させ叙述しなさい。

— 答案の作成の留意事項 —

- ① 答案は200字原稿用紙の4枚以上で、50分以内に作成する事。
- ② 論述の構成様式、原稿用紙の使用法、語法と正書法に留意する事。
- ③ できるだけある事の蓋然性、或いは妥当性を論理的に述べ、一般的な理論とかけ離れないようにする事。
- ④ 旧石器時代の人々が土器を作らなかった理由を明示する事。

— 模範答案例 —

旧石器時代の人々は土器を作らなかった。人は狩りや採集をし、あちらこちらに移しながら生活した。食糧を求めつつ移動したのでわざわざ土器を作る必要性を感じなかったはずである。食べ物を食べ、蓄えるためには、割れやすく重く、運びにくい土器より、樹皮や実の皮、石、動物の骨、革等を利用する方がむしろ便利だったはずである。

そうすると、新石器時代の人々が土器を作る必要性を感じたのは、まず、ある所に定着生活をした事と関係があるだろう。食糧を求めてあちらこちらに移らず、ある所に定着すると、捕った獣や魚、或いは木の実を蓄える必要性が高くなり、梅雨と日照り等大変な自然

環境に備え、干す或いは塩漬けの肉や果物や野菜等を蓄えて置かなければならなかっただろう。勿論、樹皮等を利用する事もできるが、定着すると集団の規模が大きくなり、肉や果物や野菜等貯蔵する物が増えるので、より便利な物を求めるようになっただろう。

農耕が始まるとその必要性はさらに高くなったはずである。穀物は自然に育つ物ではない。長い間一定の場所に居つつ、種を巻き、水をやり、草取りをしなければならぬ。その上、穀物はいつでも収穫できる物ではない。秋に収穫した穀物を次の収穫まで蓄えて置かなければならなかったのである。そのため貯蔵の必要性を更に強く感じただろう。ところで、穀物は散らばりやすく、水の側では芽生えやすく腐りやすい。貯蔵のみならず、食べる時も同じである。今までの樹皮や革等よりもっと便利で、確実な道具が必要になっただろう。

このように新石器時代の人々が土器を作ろうとしたのは定着生活をし、農耕が始まったから貯蔵の必要性をもっと強く感じたからだと言える。

— 採点基準 —

(表8参照)

— 採点時留意事項 —

- ① 基準分量(200字の原稿紙の5枚)に及ばない時、1点を減点する事。
- ② 規定時間を超えた時、1点を減点する事。

— 判定 —

(表9参照)

(表 8 : 採点基準)

配点 採点要素	3点	2点	1点	0点
旧石器時代に土器を作らなかった理由	旧石器時代の人でも貯蔵手段を使用したがる、移動生活をしたので割れやすくて重く、運びにくい土器を作る必要性を感じなかった事を説明している。	旧石器時代の人には移動生活をしたので土器を作る必要性を感じなかった事を説明しているが、旧石器時代の貯蔵手段の使用について言及がない。	旧石器時代の人には土器を作る必要性を感じなかったと言うことだけを説明している。	旧石器時代について説明がない。
定着生活と土器の製作との関連	定着生活をするため食糧備蓄が必要であると言うことを認識し、移動生活より定着生活をしてから土器の必要性が高くなったことを自然環境の変化に対応する必要性、剰余生産物の可能性等具体的な例を挙げて説明している。	移動生活より定着生活をしてから土器の必要性がさらなる高くなったのを説明している。	技術が発達したから、賢くなったからであると説明している。	定着生活と関連のある説明がない。
農耕生活と土器の製作との関連	①農作は収穫まで時間がかかる②農作をすると穀物を一度に収穫する③穀物は土器のような貯蔵手段を必要とする。これらの三つの中で二つ以上を挙げて土器を作ろうとしたことを説明している。	①②③の三つの中で一つだけ挙げて土器を作ろうとしたことを説明している。	①②③の三つの要点を把握できず、農耕生活と土器使用の必要性を説明している。	農耕生活について説明がない。
論述の構成及び文章の表現	文の全体的な構成に論理があり、語法と正書法が正確である。	文の全体的な構成に無理がなく、語法と正書法が多少不正確な部分があるが、本意を損傷させない。	文との連結が自然ではなく、語法と正書法に間違いが多い。	主題と関係がない内容を叙述し、又は内容がない。

(表 9 : 判定)

区分	点数の合計	判定の点数
上	10点~12点	2点
中	5点~9点	1点
下	4点以下	0点

5. おわりに

韓国における教育改革は、評価方法の改善という方向を明確にして進められている。論述型の評価問題と数値化によるその客観性の保障という課題に取り組みつつある。その基本的方法は、本論で紹介したとおりである。今後、この試みが実際に成功するのかどうか、また、実践上どのような問題点が発生しどのような方法で解決されるか。このような点について、今後ともその動向を検証していく必要性を感じる。それは、「一問一答型」、「暗記型」評価の改善が求められ、「思考力」の育成の重要性が主張される日本の歴史教育の改善にも有効な示唆を与えると考えられる。この点に関して、実践が一般化する次年度以降、別稿で報告したい。

(参考文献)

- 韓国教育課程評価院編『国家教育課程に基づいた評価基準及び道具開発研究』（総論）（1998.12）
 韓国教育課程評価院編『高等学校国史評価方法改善方案』（1999. 1）
 教育部編『社会科教育課程』大韓教科書株式会社（1998.8）
 李 明熙「韓国／新しい評価づくり」『社会科教育研究』日本社会科教育学会（1998）

(注)

- 1) 韓国教育課程評価院編『国家教育課程に基づいた評価基準及び道具開発研究』（総論）（1998.12） P. 23
- 2) 教育部編「教育課程の構成方針」『社会科教育課程』大韓教科書株式会社，（1998.8） P. 2，
- 3) 前掲注1)， P. 27， 国家水準の教育課程の質の管理及評価方向との関係
- 4) 前掲注1)， P. 15， 1. 第6次教育課程の特徴
- 5) 前掲注1)， PP. iii～iv
- 6) 李 明熙「韓国／新しい評価づくり」『社会科教育研究』（1998） P. 48
- 7) 「選択型評価に対する批判的検討」前掲注1)， PP. 3～7，
- 8) 韓国教育課程評価院編『高等学校国史評価方法改善方案』（1999. 1）， P.1
- 9) 前掲注1)， P. 92
- 10) 前掲注8)， P. 35
- 11) 前掲注8)， P. 37
- 12) 前掲注8)， P. 17
- 13) 前掲注8)， PP. 18～20
- 14) 前掲注8)， PP. 20～22
- 15) 前掲注8)， P. 22
- 16) 前掲注8)， P. 23

- 17) 前掲注8)， P. 23
- 18) 前掲注8)， P. 24
- 19) 前掲注8)， P. 25
- 20) 前掲注8)， PP. 26～27
- 21) 前掲注8)， P. 27
- 22) 「国史科論述型及び叙述型評価問項の開発例」前掲注8)， PP. 60～6

（本論文は、土屋武志の指導のもと鄭潤任が執筆したものである。）